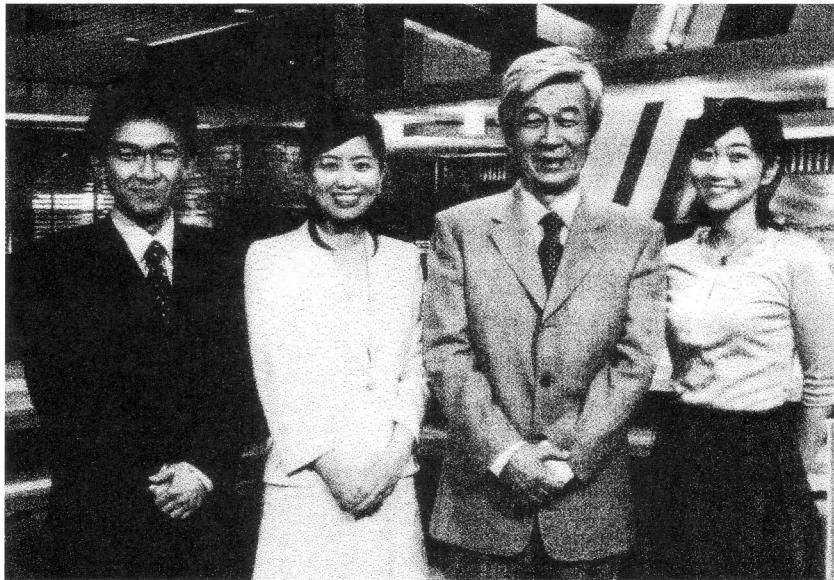


『筑紫哲也NEWS23』の 現在形の記憶

金平 茂紀 (TBS)



みんなで語ろう民放史
題字 中川 順

民間放送の歴史を残す手作りの
作業の一環として『筑紫哲也NEWS23』のことを書いて欲しいとい
う依頼が僕の所にやつて來た。僕は今、アメリカのニューヨー
クに住んでいるので、手元には資料など何もない。何よりも、去年
11月に筑紫さんが亡くなつて、その追悼文を結構な数、書いた後は、
実際のところ何だか気が抜けたよ
うな気持ちに陥つていた。失つた
ものはあまりにも大きかつたの
だ。だが、テレビニュースの現場
で30数年、仕事をしてきた自身の
立場から、このことだけは伝え残
しておかなければ、と思う事柄が
いくつもあるので、この機会に略
述しておきたいと思つ。

キヤスター・ニュースの先駆者
報道のTBS。

日本のテレビニュースの歴史を語る上でいくつかのエポックメイ
キングな出来事がある。

たとえば1962年10月1日、
日本のテレビニュースに一時代を
画したJNN系列のキヤスター・
ニュース『ニュースコード』のス
タート。次に『ニュースセンタ
ー9』の磯村尚徳氏にみられたキ
ャスター像の個性化、および「語り
かけ」のスタイルの導入、久米宏
をメイン・キャスターに据えて夜
10時の時間帯に大型報道番組を開
拓した『ニュース・ステーション』
の創始などがそれのことがらの
一部である。

昨年11月、筑紫哲也さんが亡くなりました。朝日新聞ワシント
ン特派員、『朝日ジャーナル』編集長を経て、TBSの『筑紫哲
也NEWS23』が18年余。静かな語り口でも舌鋒は鋭く幅広い人
脈で文化を語り、最後まで現場にこだわった傑出したジャーナリ
ストの、日本記者クラブ受賞半年後の死でした。

今回の『みんなで語ろう民放史』は『NEWS23』デスクなど、
筑紫さんと交わりが深かつたTBSアメリカ総局長金平茂紀さ
んの、筑紫哲也が、何を残し、何を継承すべきかです。

『筑紫哲也NEWS23』が始まりたのは1989年の秋。この年は1月に昭和天皇が亡くなり、6月には天安門事件が起き、11月にはベルリンの壁が崩壊するという激動の年だった。

なぜ、TBSは夜11時台に大型のニュース番組を創設したのか、または、せざるを得なかつたのか？ その作業に実際に関わつた一人として言えるのは、前述の『ニュース・ステーション』効果が実は絶大だったのだ。

「報道のTBS」を長年にわたつて自認してきたTBS＝JNNにとって、競合局（テレビ朝日）の夜の時間帯での大型ニュース報道番組の成功は、耐えがたい屈辱と映つたのだ。そこで、1987年秋に1時間のデイリーのニュース番組『プライムタイム』を立ち上げたのだった。

JNNの総力を結集するとの「上からの」号令のもとに『ニュース・ステーション』の真裏（午後10時）にぶつけられたこの番組は、しかし思わぬところで躊躇してしまつた。

その最も大きな要因のひとつが、実は筑紫哲也氏だったのである。

る。生前も筑紫さんは、さまざまに
な配慮からこのことを大っぴらに
は語っていない。



「望外の喜び」—日本記者クラブ賞

当初、メイン・キャスターに擬せられていた筑紫さんが勤務していた朝日新聞社との間で、この番組を引き受けるにあたって深刻な「軋轢」が生じたのである。当時、筑紫さんは無任所の編集委員の肩書でニューヨークに在住していた。やむなく、番組は筑紫さんのキャスター就任をあきらめ、TB Sの朝のワイドショーを担当して人気を博していたＮＨＫ出身の森本毅郎氏をキャスターとしてスマークトした。

当初、メイン・キャスターに擬

番組名に筑紫哲也という個人名を冠すること、キャスターは編集長も兼任すること、ニュース番組のテーマ曲をもつこと（最初のテーマ曲が井上陽水の『最後のニュース』である）、さらには、このことが大きな特徴だったのだが、二部構成になつていて（関西地方など一部は放映せず）、その第二部が「解放区」的な実験場になつていたことなどがあげられよう。

この間、古巣の朝日新聞社との「軋轢」を、細心の配慮で解きほぐしていく筑紫さんは、満を持して形で1989年秋の番組スタートを迎えることになる。

『筑紫哲也NEWS23』の
編集長兼キヤスター

『筑紫哲也NEWS23』の 新機軸 編集長兼キャスター 筑紫哲也

また、いくつものシリーズ企画がストレートニュースと並列的に並び、「乱」「変」「論」「壞」「心」「幸福論」「このくにのゆくえ」「ニッポンが危ない」など、いわば筑紫編集長時代の『朝日ジャーナル』的な特集センスが際立つた構成が、視聴者の共感を得ていった。

さらには街の声を拾いまくる『異論・反論・オブジエクション』や、ニュースの短い項目を独自の切り口でまとめあげる『ニュース・ラウンドアップ』などの新スタイルを確立していった。



「NEWS23」の打ち合わせ

名物コーナーとなる「多事争論」が始まったのは、番組開始から4年ほどが経過してからだつたと記憶しているが、手元に資料がない

ので確かめようがない。

僕が編集長(職場での役職は『NEWS23』デスクと呼ばれていた)を務めたのは、1994年6月から2002年の2月までのおよそ8年間である。



モスクワ特派員時代の筆者(91.8.19)

歴代のデスクのなかで最も長い期間のお付き合いをしてきたことになる。

もつともその前のモスクワ特派員時代の4年間に、『NEWS23』とは深いつながりができてしまっていた。

前述した第二部のなかで『世纪末モスクワをゆく』という不定期の連続特集を企画制作させてもらい、きわめて長い時間のVTR作品を放送する機会を与えられたこ

とが大きかった。

これは、当時の第二部の岡田之夫編集長の尽力が大きかったのと、何よりも筑紫さん自身が面白がってくれて応援してくれた。

筑紫哲也とともに、人と番組が育つていった

僕自身が編集長を務めたからよくわかるのだが、『筑紫哲也NEWS23』は筑紫さんの編集方針やニュースセンスが番組内容やスタイルによく反映された番組だったと思う。筑紫さんは一見、我を張らないソフトなタイプにみえて実は、実に我を通すハードな志を持つていた人だった。

デスクになると、通常は僕らは午前11時頃には出社して、それまでに新聞各紙に目を通し、11時30分の各社の昼ニュースをみて、NHKの全国ニュースが終わる頃に報道局の大部屋センターでテーブルで招集される編集会議に出席する。その後、簡単なランチを済ませた後に、おもむろに筑紫さんに電話をかけるのが日課だった。前もつて筑紫事務所にファックスで送つてある当日のニュースの項目表を材料にして協議し、今日の



「地雷ZERO～21世纪最初の祈り～」

そこで、筑紫さんとの打ち合わせの結果をもとにさらにスタッフのあいだで協議を重ね、各自の仕事の分担を決める。考えてみれば、楽しいものづくりの場だった。本番が始ままでのあいだ、各自、取材現場に散る、あるいは自分の企画のための調べものをする、あるいは、人と会つてくる等など。

何でもありだったのだから。

デスクという仕事はツライこともたくさんあつたが、実にやりがいのある仕事だったと思う。特に『筑紫哲也NEWS23』のデスクを経験した人たちは皆そのことを知っているはずだ。辻村国弘さんは第二部で『世界遺産』シリーズの紹介をはじめたバイオニアで、

トップはどうにしようか、あるいは、このニュースはもつと掘り下げが必要だとか、きょうの特集は何なのか、つまりその夜の番組内容全体を打ち合わせるのである。

その作業を積み重ねるうちに、自然とお互いの意思が通い合つようになる。あるいは違いを知る。そのような経験ができたことは、本当に恵まれていたと思う。通常、番組スタッフが出揃うのは、午後2時の番組の「0版会議」だった。

そこで、筑紫さんとの打ち合わせの結果をもとにさらにスタッフのあいだで協議を重ね、各自の仕事の分担を決める。考えてみれば、楽しいものづくりの場だった。本番が始ままでのあいだ、各自、取材現場に散る、あるいは自分の企画のための調べものをする、あるいは、人と会つてくる等など。

この『世界遺産』は後日、独立した番組として大きな成功をおさめることになった。

みんな『NEWS23』から出た財産だ。「タコ社長」と周囲は、仕事に没頭するあまり、デスクの当番日は埼玉県にある家に決して帰らなかつた。TBSの同期生田中龍男や横田和人も、いい時期をともに過ごしてきた。

独自な切り口が生んだ放送史に記録すべき一ページ『クリントンと市民の対話

僕らの仲間内で「エッジの立つた」という言い方をしていた、独特の鋭角の切り口の特集群が『筑紫哲也NEWS23』の存在を際立たせていた。『家族の肖像』や柳

美里の『命』、終戦記念日特集、沖縄シリーズなど、今となっては稀有な実験的な特集群に出会えたこともこの番組の財産だったと思う。さらには、この『NEWS23』の発展系として数々の特番がJNNの番組欄を飾った。これもひとえに毎日途切れることなく続いていたこの番組があつたから成し遂げられたことである。

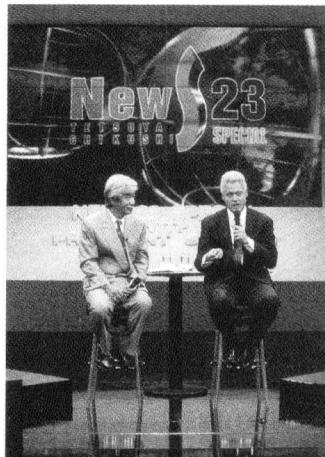
地雷ゼロキャンペーン『地雷ZERO』『21世紀最初の祈り』(2001年4月30日放送)、『筑紫哲也・立花隆21世紀プロジェクト』(人の旅ヒトへの旅)、『ヒロシマ』(あの時原爆投下は止められた)、『東京大空襲』など。さらには、各国の政治リーダーたちをスタジオに招いてのタウンホール・ミーティングが『NEWS23』の延長に展開された。

皮切りは、1998年11月に放送された『ニュース23スペシャル・クリントン大統領があなたと直接対話』だった。その後も、『朱鎔基首相があなたと直接対話』(2000年10月16日放送)と続

き、韓国のノムヒヨン、イ・ミヨンバク両大統領、アル・ゴア元副

紫哲也NEWS23』の文化事象に

もう一点、付言しておけば、『筑紫哲也NEWS23』の文化事象に



筑紫哲也NEWS23スペシャル
クリントン大統領との対話



朱鎔基首相との対話



と断じてもよい。

とは言え、筑紫・久米の両キャスターが静かながらしげを削つた『NEWS23』『ニュース・ステーション』時代は終わりを告げた。両キャスターともに、在任期間は18年半という長期に及んだのである。

大統領、シュワルツェネガー・カーリフォルニア州知事、小泉純一郎元首相、トニー・ブレア元首相と、元わば定番となつていった。

米宏の『ニュース・ステーション』も文化を扱うセンスは『NEWS23』には大きく遅れをとつていた。

斬新な文化への視点を持つ

道ニュース番組において、文化の置き場所をきちんと意識していた番組というものは、『筑紫哲也NEWS23』以前には存在しなかった。WBS23に弱点、弱みがなかつたのかと問われれば、あまりにもたくさんあり過ぎて書ききれないほどなのだ。それがテレビの報道ニュース番組のおかれてい

筑紫哲也のDNAを
現在形で継承したい

さて、ここまで一気にキーボードを叩いてきて、それでは『筑紫哲也NEWS23』に弱点、弱みがなかつたのかと問われれば、あまりにもたくさんあり過ぎて書ききれないほどなのだ。それがテレビの報道ニュース番組のおかれてい

筑紫さんが亡くなり、これまでのような形での『NEWS 23』が2009年3月末をもつて終わりを告げることになり、日本のテレビニュース史に大きな地殻変動が起きようとしている。

新聞・通信社に伍して、ジャーナリズムの一角に確固たる位置を占めたいとこころざし、長年テレビニュースの仕事をしてきたのは、たくさんの先陣たちのたゆむことない努力の成果の継承があつたからだ。

あれだけ長く生き延びてこられたと思う。紙幅の許す限り、この番組が置かれていた環境の厳しさについて若干触れておくことが、テレビニュースの未来につながると思う。

これだけは確実なことだが、勤務するテレビ局の内外も決して『筑紫哲也NEWS 23』を全面支持して支援してくれる人々ばかりではなかつた。露骨に敵対の意思を示す人は表面的には少なくても、潜在的には「何だ、あの番組は、勝手なことばかりやつていて」というような、半分以上、嫉妬ややつかみに根ざした感情的な反発

を常に感じていた。

また、言葉の本質的な意味で言う、「反動」的な輩という人々は

多かれ少なかれ組織内には存在す

るものである。それは政治家に対する取材者の立ち位置の取り方を

みれば歴然としていたし、組織内

で権力をどう行使するかという点

でも、本来、水平的な取材者たち

の職場において権威や権力をふりかざしたい人々が現れては去つて

いくのを、『NEWS 23』とい

う組織の内と外にいながら僕も見さ

番組で多くの人が筑紫氏を語りました



番組で多くの人が筑紫氏を語りました

るを得なかつたことがあつた。筑紫さんは、そのような動きと正面対決するようなナイーブな人では

なかつた。おそらく朝日新聞時代のさまざまな経験が、そのような

の世紀の現実を見渡した時に、この時代を画した報道番組の精神、言い換えれば『筑紫哲也NEWS 23』のDNAを継承していく

筑紫さんが亡くなり、今のテレビ

苦悩しフエアであろうとしたとい

うことだ。そして、残念ながら、

筑紫さんが亡くなり、今のテレビ

に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書

に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書

に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書

に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書

に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書

に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書

に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書

に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書

に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書

資料提供



筑紫さん ありがとうございました

東京放送
日本記者クラブ